

# 死生学とスピリチュアリティ 霊魂の存在 超心理学

2022-06-06  
06-11 小改  
敏 翁

## I. 過去の経緯と死生学最終版

『死生学とスピリチュアリティ』に関してはこのテーマ発見に至る経緯、とその概要について昨年末、本ホームページに纏めて掲載しましたが、

### 死生学とスピリチュアリティ

それはこのテーマの全体像の纏めとしては、不満足なものでした。

そして纏めの更なる充実を図ってその後も多数の関連書籍に目を通しました。その結果、このテーマのカバー範囲は極めて広く、その全体像を満足出来るように纏める事は諦め、論点を私が最も興味を持った霊魂の存在、その証明へのアプローチ、と問題点、それが「超心理学」ですが、に絞って述べる事でこのテーマに区切りをつける事と致しました。

## II. その後の検討

久し振りに読んだ書籍の大半をご覧に入れます。4月末の状況です。



この様に揃えた画像が得られたのは、この4月から横浜市立図書館の貸し出しが6冊から10冊に広がった事が利いています。

以前、「宮沢賢治」の議論の時に11冊の画像をご覧に入れたと思いますが、それは、市立図書館から6冊、県立図書館から5冊借り、前者は鶴見図書館で、後者は県立川崎図書館(競輪場の傍にあった)で入手出来たからでした。何れも自宅から車で10分程度で行けるところです。

それが、2年ほど前に後者の図書館が無くなって仕舞ったので、暫く振りの書籍勢揃いの画像になった訳です。

上記画像は、左から

1. 笠原敏雄 『超心理学読本』2000年 講談社文庫
2. 石川幹人 『超心理学 封印された超常現象の科学』2012年 紀伊国屋書店
- 3. ディーン・ラディン著 竹内薫監修 石川幹人訳  
『量子の宇宙でからみあう心たち 超能力研究最前線』2007年 徳間書店
- 4. マイケル・タルボット著 川瀬 勝訳  
『投影された宇宙 ホログラフィック・ユニバースへの招待』新装版 2005年 春秋社
5. 山田剛史・井上俊哉編 『メタ分析入門 心理・教育研究の系統的レビューのために』  
2012 東京大学出版会
6. 南風原朝和 『心理統計学の基礎 統合的理解のために』2002 有斐閣
7. 南風原朝和 『続・心理統計学の基礎 統合的理解を広げ深める』2014 有斐閣
8. 岡田涼・小野寺孝義編 『実践的メタ分析 戦略的・包括的理解の為に』2018  
ナカニシヤ出版
9. Brian Mullen 著 小野寺孝義訳 『基礎から学ぶ メタ分析』2000 ナカニシヤ出版
10. 三浦清宏 『近代スピリチュアリズムの歴史 心霊研究から超心理学へ』2008 講談社
11. M・ウルマンほか著 井村宏次監訳 神保圭志訳 『ドリーム・テレパシー』1987  
工作舎
12. 堀江宗正 ポップ・スピリチュアリティ メディア化された宗教性 2019 岩波書店
- 13. シェリー・ケーガン著 柴田裕之訳 『「死」とは何か』[完全翻訳版] 2019 文響社

上記13冊中、●を付けたものは私の蔵書、残りの10冊が市立図書館からの借用です。左から1.~4.の4冊を重点とし、次の5.~7.の3冊を加えて本論を纏める事としました。

以下文体を変えます。

後で述べるが、超心理学を理解するには、「メタ分析」とその基盤となる「心理統計学」の知識が必要になる。上記1.~3.でその必要最小限の部分には触れるが、もう少し理解を深めたい方には、5.、6.、7.の3冊をお勧めする。

以上1.~4.の4冊はいずれも「超心理学」とは何か、この分野の研究の特質と難しさ、新しい理論構築の試みなどについて触れているものである。

この中では1.が簡にして要を得た良い読本だと思う。

初め、これを中心に本稿を纏めようと思ったのだが、この分厚い(356頁)文庫本は、以下紹介する始めのあたり(50頁あたり)までは良いのだが、頁が進むとスキャナーで旨く読み取ることが困難になり、議論の中心部分は、やや表現に難解さがあるが、3.を用いる事にした。

この本1.を購入後バラバラに分解してスキャナーという手段も考えたのだが、本書は入手困難な状態になっていて諦めた。

### III. 使われる言葉の簡単な説明と ESP の研究

#### 3.1 言葉の説明 「超心理学読本」から再録(一部省略)

##### キーワード

|             |  |
|-------------|--|
| 超心理学        | これまで知られている科学法則では説明のつかない、人間や動物が関係する現象の研究を行なう科学の一分野。い  |
| 心霊研究        | これまで知られている物理法則では説明のできない心理的、物理的現象の研究。超心理学の古称として用いられる場合と、定量的、統計的超心理学から距離を置目的で用いられる場合とがある。’                               |
| 心霊主義        | 死後生存は事実であり、死者と生者の交信は霊媒により可能であるとする信仰に基づく教義および活動のこと。   |
| オカルト        | 魔術、占星術、妖術、占いなど、秘教的知識や神秘的な力により実践され、その本質が解明されるとする思想。超心理学とは、扱う対象が共通する場合はあるが、超心理学が科学的研究分野であるのに対して、オカルトは思想であり、両者を混同してはならない。 |
| 超常(サイ)現象    | 通常の因果律を超えて起こる現象のことで、ESPと念力の総称。   |
| 特異現象        | 心霊現象や超常現象という用語の持つ意味合いを払拭する目的で、最近用いられるようになった用語。変則的現象とも言う。   |
| 超感覚的知覚(ESP) | テレパシー、透視、予知の総称で五感を介さずに情報を得ること。   |
| テレパシー       | 他者の思考内容や心理状態が超感覚的にわかること。   |
| 透視          | 事物や同時的な物理的事象に関する情報を超常的に得ること。   |
| 予知          | 通常の方法では予測も推測もできない未来の出来事をあらかじめ知ることに。  |
| GESP        | テレパシーと透視の両方が関与している可能性のあるESPのこと。  |
| 念力(PK)      | これまで知られている物理的力を用いることなく、物体や物事の経過を変化させる心の力のこと。   |
| マクロPK       | 量子力学的レベルのものよりも大きな物体(微生物、サイコロ、スプーンなど)をターゲットにした念力のこと。  |
| ミクロPK       | 量子力学的レベルをターゲットの対象にした念力のこと。   |
| 生体PK        | 人体を含めた、動植物に対して働く念力のこと。   |
| 死後生存        | 肉体の死後、少なくとも一時、肉体から離れた意識が存在すること。永遠に存在するという条件を必ずしも伴わない点で、霊魂不滅と異なる。   |
| 体脱体験        | 意識の中心が、肉体とは別の空間に存在するように感じられる体験のこと。   |
| 臨終時体験       | 死期の迫った者が、意識の清明な時に、既に死亡している親族や友人等の姿を見たり、気分の昂揚などの意識の変容状態を起こしたりする現象のこと。   |
| 臨死体験        | 臨床的に死を宣告された、もしくはそのように見えた者が、蘇生した後に語る、その間の体験のこと。   |
| 憑依          | 死者の人格が、生者に乗り移ったように見える、ふつうは一時的に起こる現象のこと。  |

生まれ変わり 心ないしその一部が、肉体の死後、別の肉体に宿って再生する死後生存の一型。

偶発的サイ体験 日常生活の中でたまたま起こる、サイ（超常現象） によると思われる体験の総称。

予知夢 予知的な正夢のこと。

ポルターガイスト 特定の人物（中心人物） の周辺で起こることの多い、ふつうには説明のつかない物理現象のこと。 超心理学では通常、中心人物の無意識の念力によるとされる。 人物中心に起こる点で幽霊屋敷と異なる。

実験的サイ現象 実験状況で起こる、サイによると思われる現象の総称。

## 3.2 ESPの研究

### 1. 「超心理学読本」第一章 ESPの研究の前半の抄録から始める。

#### 身近で起こる ESP

先ず笠原の身近で起こった ESP とと思われる例が語られているが、煩雑になるので省略する。

#### 偶発例研究の難しさ

これほど劇的ではないにしても、この種の体験は私たちの日常でもよく耳にするものである。遠い戦地に赴いている息子が夢枕に立ち、その時点で戦死していることがあとで確認されたとか、不吉な予感がするので飛行機の予約をキャンセルしたところその飛行機が墜落したとか、紛失物のありかを夢の中で教えられたなどの話は昔から少なくない。

ところが、こうした出来事が超常的な原因によるものであることを証明するのは意外に難しい。 事実誤認や作話などの可能性を排除したうえ、論理的推定や偶然の一致などの可能性をも否定しなければならないからである。

現在のところ、サイ現象の限界やサイ現象独自の特徴はわかっていない。

そうした特徴がわかれば話は簡単である。

それが確認できさえすれば超常現象だと言えるからである。 ところが、それがわかっていないがゆえに、「通常の原因では説明できない現象」といった否定的定義を用いるしかなく、この点こそ、超心理学的研究の大きな特徴であり、先述のように、研究を難しくしてきた大きな理由のひとつなのである。

後続の章で述べる念力現象や死後生存の証拠に関する研究と同じく ESP の研究も、1882年、ロンドンに心霊研究協会（SPR） が創立された前後に開始されたと言える。現象そのものについては、有史以来、世界各地で知られていたにもかかわらず、科学的研究はその頃まで行なわれることがなかったのである。

初期の研究としては、SPR が行なった ESP、体験に関する大規模な調査や、いわゆる精神霊媒を用いた交霊会形式の実験、線画を”送・受信、するテレパシー（厳密には GESP）実験があげられる。

その後、J・B・ラインの登場もあって、ESP研究の方法論は大幅に変更され、いわゆる”能力者、ではない一般人を被験者にした、統計的手法を用いる強制選択式の実験が中

心となるに至った。

## ESP の分類

ESP は、テレパシー、透視、予知の三種類に分類するのが一般的であるが、テレパシーと透視に二大別し、予知については、予知的テレパシーと予知的透視とに分けたうえで、それぞれの項目に入れるなど、他の分類も可能である。

テレパシーとは、五感を介することなく行なわれる生物体間の直接の交信であって、途中の障害物には（またおそらくは距離とも）無関係に起こる現象を指す言葉である。それに対して透視は、生物体が物体の状況を、やはり五感を介さずに直接に認知する現象を指す。つまり、テレパシーでは発信者と受信者がいるのに対して、透視では受信者しか存在しないのである。しかし実際には、テレパシーと透視の両方が働いた可能性が考えられる例も少なくない。この場合は GESP と呼ばれる。また、予知とは、予測も推測もできない未来の事象を知るといふ現象のことである。

(以下略)

ここからは、3.ディーン・ラディン著 石川幹人訳『量子の宇宙でからみあう心たち  
超能力研究最前線』により話を進めるが、先ず本書の特種な性格などについて、本書の『訳者あとがき』を元に触れてみる事としたい。

本書は、2006年4月にアメリカで発刊された、

**Entangled Minds: Extrasensory Experiences in Quantum Reality**

の邦訳（一部抄訳）である。

著者のディーン・ラディン（Dean Radin）は、イリノイ大学で電気工学の修士号と心理学の博士号をとった超心理学者である。

彼は、超心理学国際会議で最多の四回にわたって議長を務めるなど、絞密でかつ大胆な実験研究に定評のある、第一線の研究者として知られている。

ラディンには、研究論文や解説の執筆実績が数多くあるが、著書は本書で二冊目である。前作は八か国語に翻訳され、英語版は10刷を超える世界的ベストセラーになっているが、残念ながら邦訳はない。

じつは、訳者は八年ほど前に、前作のほうの翻訳を企画し、出版社を四社まわったのであるが、一様に内容が科学的すぎるし分量も多すぎると、翻訳出版を断られてしまった。

本訳書の企画は、過去の失敗を反省し、サイエンス・ライターの竹内薫氏の協力も得ながら満を持して臨み、今回は首尾よく実現にこぎつけたのである。

内容が科学的すぎるし分量も多すぎるといふ点は前作と同様であったのだが、この点は訳出の過程で工夫した。本書の原書は、一般読者から科学者までを広く対象とした内容であり、テーマごとに入門的な解説からこみいった議論までが書かれている。訳書のほうは、日本の実情をふまえて、対象を一般読者のほうへ少しシフトし、原注、参考文献、索引、謝辞も削った。

結果として、訳者がふだん接している文科系の大学生の方々にとっては、本訳書は原書よりも飛躍的に読みやすくコンパクトになっていると自負している。

なお、これらの訳出上の対処と原書の全参考文献は、ページごとの訳注というかたちで、訳者の主宰する「メタ超心理学研究室」のホームページに公開してある。ぜひそちらも閲覧して、本書の議論が膨大な文献に支えられているという事実を確認していただきたい。

ビジネス上の問題で科学研究の単行本が邦訳されにくくなっている昨今、こうした形態もひとつの新しい試みとして意義があるだろうと思っている。

-----  
私敏翁も上記ホームページを閲覧してみたが、膨大な研究論文の羅列が殆どだった。本書の基礎には統計学がある。それに目を瞑って読む事も出来るが、我々理系の人間にはそれでは寂しい。

その為の統計学の基礎が、訳者である石川幹人氏の著書 2.『超心理学 封印された超常現象の科学』に付録として付いている。

その部分を以下に再録して置いたので、以下を読み流した後、それを知りたくなつた方は、参照されたい。

#### 統計分析の基礎

赤括弧をクリックすればご覧頂ける。

### IV. 意識に現れる超心理 (本書第2部「実験編」第7章「意識に現れる超心理」より抽出)

#### 4.1 メタ分析

長いあいだ超心理学者たちは、簡単に再現できる決定的な実験を開発しようと努力を続けてきた。

石の落下実験で重力を調べるように、高校生なら誰でもできて圧倒的な確信がもてる超心理実験が求められる。

私的な判断や評価は必要なく、誰でもが自明な結果をすぐさま理解できる実験が理想的なのである。

最大限の努力にもかかわらず、今のところ、この探究の成果は得られていない。

あまりのいらだたしさに、一部の研究者は、そうした実験の開発は不可能なのだ信じこみ、超心理は科学の境界の外側にあるのだと主張するに至っている。

しかし、キーワードは「おおよその再現性」なのである。まもなくわかるように、超心理実験には、実際のところ再現性がある。再現がしごく簡単だというわけではないだけである。つけ加えれば、熟練した技能を必要とする実験はみな厳密な意味では再現可能ではない。これまで多くの超心理実験は、特殊技能をもたない一般人によって行なわれてきた。それゆえ、結果にバラッキが大きいのも当然のことである。

この重要な、超心理実験における再現性の問題を調べるために、ここでは1000を超える実験をふり返る。それらを総合すると、超心理現象の再現性が現れ、統計的に妥当な証拠が見えてくる。こう述べると、読者の懐疑心を呼び起こすにちがいない。

「それなら見せてみろ」という声が聞こえてくるようだ。すぐにご覧に入れるのだが、その前に、この種の証拠を評価するとき生じるジレンマについて触れておきたい。

「細部の奥底には悪魔が住む」という格言がある。物事を一気に片づける劇的な主張を打ち立てるのは容易だが、その主張を支える細部にひとたび注目すれば、おうおうにして当初の信念が弱まってしまうことを、この格言は意味している。悪魔に臆すること

なく、細部の奥底に挑まねばならない。しかし残念なことに、そこには特別な訓練を積まないで理解できない呪わしい専門用語や概念が潜んでいる。論争となっている実験について、各陣営の主張を評価するときは、とくにそうした専門用語の理解が必要となる。

すなわち私は、一般受けするような議論に終始することなしに、確実に証拠を吟味したい、その一方で、細部にこだわるばかりに眠気をもよおす本に仕上げないようにもしたいのである。これが私の感じるジレンマである。

私の解決策は、細かい専門事項や参考文献は巻末注に移し、細部に情熱を燃やす方々にはそこへ至る道すじを示すにとどめることである。

[邦訳では巻末注にあたる情報を訳注としてホームページ公開している。

邦訳にともなうこのジレンマの対処については、**訳者あとがき**を参照されたい。]

(中略)

超心理学の研究結果は、「確証バイアス」と呼ばれる人間の非合理的なふるまいへの対応に悩まされてきた。

自分の信念を支持する証拠はもっともらしく、自分の信念に反する証拠は怪しく見える心理的な癖の事である。

超心理にかんする確証バイアスを克服する方法は三つある。

実用的な応用を開発すること、新しい実験によってテスト可能な理論的説明を形成すること、権威によって大衆の総意が変化することである。いずれにしても、別々の研究者によって、独立に再現可能な結果が実験室の環境で得られることがまず必要である。どのように再現性を示すかという、過去の数々の実験結果をまとめて分析するのである。言い換えれば、過去の分析を分析することであり、「メタ分析」と呼ばれている。

メタ分析は、生態学、心理学、社会学、医学などの、いわゆるソフト・サイエンスの中核的な道具となりつつある。メタ分析の成果は、すでに数千例も発表されており、メタ分析にテーマを絞った論文誌もいくつか刊行されている。またメタ分析は科学的根拠にもとづく医療という新しい流れの基礎をかたちづくっている。

メタ分析は、その重要性が高まるに従って、たんに実験結果を加え合わせる手法から洗練された手法へと、年々着実に進歩してきている。

メタ分析については、三つの問題がおもに検討される。

第一に、再現可能であると判定するには、異なった実験をどのように加え合わせるのか(リンゴとオレンジの問題)

第二に、よく企画された実験と、そうでない実験があった場合にどう対処するのか(質の査定問題)

第三に、成功した実験ばかりで、失敗した実験が報告されずに隠れていると懸念される場合にどう対処するのか(お蔵入り問題)、である。

**リンゴとオレンジの問題**は、異なった実験者によって、異なった被験者を対象にして、異なったデザインで行なわれた実験結果を加え合わせてもよいか、の問題である。すべての実験に普遍的な項目を分析したい場合、答えはイエスである。リンゴとオレンジに共通の項目、つまりフルーツについて分析するときは加え合わせてよいのである。

超心理実験では、個々の実験は決定的に違っていても、それらを加え合わせて超心理の効果が全体としてどの程度出ているかを分析するのだ。もちろん、赤いフルーツだけに興味をもっていたり、とくにイチゴには興味がなかったりするときは、実験を選択しながら加え合わせるべきである。しかし本書のメタ分析では、超心理の証拠を査定するというとても広い動機で取り組むので、可能な限りあらゆる実験を含めていく。

**質の査定問題**は、実験の企画や実施がちゃんと行なわれているかが実験によってまちまちである場合、どのように加え合わせるかの問題である。いいかげんな実験に、注意深い実験と同様な「証拠の重み」を与えるべきではない。研究の質があがれば（サンプル数が増え）、当初の報告より概して効果は小さくなるので、加え合わせの問題は大きくなる。この実験の質の査定には、多くの方法が考案されている。

**お蔵入り問題**は、研究者が肯定的結果の研究を報告したが、否定的結果の研究を報告したがない事実に起因する問題である。選択的報告の問題とか引き出し問題とも言われる。不成功に終わった研究資料を奥の倉庫の「引き出し」にしまいこんでしまう傾向から命名された。未発表の否定的研究がたくさんあると、そのデータは公表した証拠をとときには無効にするほどである。お蔵入りしたデータの量や効果を推定する方法が、最近ますます洗練化されてきた。

ここで、上述の 1000 を超える実験の纏め(本書では最後の第 14 章にあるが)を  
 ご覧に入れよう。

表 1

表14-1：  
 本書の実験報告のメタ=メタ分析。超心理があるとするのがもっとも妥当な解釈である。

| 実験の種類     | 研究の数 | 試行数    | 偶然比 (分の 1)            |
|-----------|------|--------|-----------------------|
| 夢見実験      | 47   | 1270回  | $2.2 \times 10^{10}$  |
| ガンツフェルト実験 | 88   | 3145回  | $3.0 \times 10^{19}$  |
| 視線感知実験    | 65   | 34097回 | $8.5 \times 10^{46}$  |
| 遠隔意図検出実験  | 40   | 1055回  | 1000                  |
| 遠隔凝視実験    | 15   | 379回   | 100                   |
| サイコロ念力    | 169  | 260万個  | $2.6 \times 10^{76}$  |
| 乱数発生器念力   | 595  | 11億ビット | 3052                  |
| 総計        | 1019 |        | $1.3 \times 10^{104}$ |

タイトルに「メタ=メタ分析」とある。これはメタ分析した複数の結果を更にメタ分析する事を意味する。上表の各行はそれぞれメタ分析を示している。

例えば一番上の行は、47の「夢見実験」をメタ分析して偶然比が $2.2 \times 10^{10}$ 分の1である事を示している。そして、上表の7つの実験のメタ分析結果を更にメタ分析すると偶然比が $1.3 \times 10^{104}$ 分の1となる。

即ち言い換えれば、総計1019の研究のメタ分析から、超心理があるとするとそれが間違える危険は、10の104乗分の1以下に留まる、即ち超心理はあるとするがもっとも妥当な解釈である事を示している事になる。

メタ分析という言葉は、G・V グラスが1976年発表の論文で使い始めた。

もう少し詳しく知りたいと思って8、9、及び5を読んだ事に成る。

このなかでは5が入門書として良く出来ていると思うが、メタ分析の対象が心理学など社会科学の分野がメインの為文科系の読者向きに書かれていて、数式が殆ど出て来ない。

この統計手法は、我々が品質管理などで用いていた統計学には無い概念が含まれている。それは、人の心の様な計量的に取り扱い難いものを扱うからである。

その辺りをもう少し知りたくて見つけたのが6と7である。

表1には種々の実験項目が集められていて、本書では各々の説明が可成り詳しく掲載されている。

ここでは再び、第7章に戻りこの中から、「夢見実験」について抄録する事にしよう。

## 4.2 夢見実験

先ず、著者ラディンの体験、知り合いの女性が父親の死を夢見、翌朝それが事実である事を知るエピソードを紹介しているが詳細は省略する。

こうした体験の可能な説明のひとつは、世界中では何十億もの夢が見られているのだから、そのうちのいくつかは現実とたまたま一致していてもおかしくない、である。

たまたま一致した夢見の体験を多く耳にするので、夢で超心理現象が起きると考えがちになる、という。

事実、多様な文化圏の調査で、半分以上の自発的な超心理体験は夢見状態で起きていると報告されている。そのうちの多くは、遠くにいる家族の事故や死の知らせである。

この種の報告があまりに頻繁にあるので、研究者は、管理した実験室で同様な超心理体験が起きないものかと思いはじめた。実験室であれば、偶然の一致仮説を厳密に査定できる。その種の試みが一九六〇年にはじめて行なわれた。精神科医のモニターギュ・ウルマンが、霊媒アイリーン・ギャレットを対象に行なったのである。

しかしこの実験は旨く行かなかった。(詳細省略：敏翁)

実験としては予期せぬ失敗であったが、興味をそそる事態となった。そこでウルマンは、実験室をブルックリンにあるマイモニデス医療センターに移し、本格的な実験を開始した。1966年から1973年まで、ウルマンと心理学者スタンリー・クリップナー、そして多くの協力者たちは、379試行の夢見実験を行なった。

以下多少煩瑣感もあるが、その実験の詳細を記す。

これらの実験のほとんどでは、受信者の役割を果たすボランティア（かりにジルと名づけよう）がマイモニデス夢実験室で一晩を過ごす。ジルは事前に、送信者の役割を果たす実験者（こちらはジャックと名づけよう）と会って懇談する。

ジルは、眠る準備が整ったならば、防音・電磁シールドルーム（心理学の厳密な管理実験でよく使われる外部からの信号を遮断する小部屋）に案内され、頭部に脳波と眼球運動を検出する電極を装着される。

それ以降ジルは、実験が終了するまで、ジャックはもとより誰とも会うことはない。シールドルームの隣室では一晩中、電気技術者がジルの脳波と眼球運動をモニターしている。電気技師が急速眼球運動状態（REM期、日本語で「レム期」と呼ぶ）を認めると、夢見が始まったとみられるので、ジャックに合図が出される。

ジャックは別の離れた部屋で送信者の役割を果たすのだが、マイモニデスでは、ジルとジャックの距離は実験によって異なり、10メートル、30メートル、22キロメートル、ときには72キロメートル離れていた。

ジャックが遠くの部屋に行く前に、実験助手はターゲットの絵が厳封されている封筒を手わたす。その封筒は、多数の封筒のセット（普通八枚または十二枚であった）から無作為に選ばれたものである。

ジャックは離れた部屋に行き封筒を開けて、なかの絵を見つめる。実験中にターゲットの絵が何かを知っているのはジャックだけであり、ジャックの部屋との通信は、実験の区切りを知らせる呼び鈴だけに厳しく管理されていた。ジャックは、ジルが夢見に入ったという呼び鈴の合図に従って、ジルの夢に絵のイメージをもとにした影響を与えようと、心的な努力をする。ジルの夢見が終ると再度合図があつて、ジャックは送信を終える。電気技師はすみやかにジルを起こして今見た夢の内容を報告させ、それを録音しておく。報告が終わったら、ジルはまた眠りにつく。この手順は夢見ごとに繰り返されるので、一晩には、三回から六回の報告が行なわれる。加えて翌朝には、ジャックが送信しようとした絵の最終的な印象を報告する。すべての録音された報告は文書化して判定に使用する。

実験の終了後、実験に参加してなかった判定者に、その文書化した報告と、封筒のセットにあつたすべての絵の複製（そのうちのひとつがターゲットと同一である）をわたす。判定者は、ジルの報告とどの絵がどの絵より合っているかを調べ、ランキングのかたちで評価する。報告ともっともよく合っている絵が一位であり、もっとも合っていない絵が最下位（八位または十二位）である。その結果、ターゲットの絵が上位半分にランクされていれば正答であり、下位半分にランクされていれば誤答である。夢見実験がまったくの偶然であれば、コイン投げと同じで、五〇パーセントの確率で正答するはずである。

夢見実験に相当することを自分でやってみるのもお勧めである。親やきょうだいや配偶者に参加をお願いし、どんな実験で何が期待されているかを事前によく説明する。参加者の了解がとれたなら、あなたは参加者が眠っているあいだ、参加者をよく観察して夢を見ているようであったら起こしてみ、あなたが抱いているイメージを夢で見えていたかどうか聞いてみるとよい。良い眠りが妨げられることの許可を得ておくのを、くれぐれも忘れないように。

しかし、うれしいことに、良い眠りを妨げることなく夢見実験をする方法が開発された。

マイモニデスでは、379試行の夢見実験を行なうのに七年間もかかり、ほとんど一週間に一試行の実験ペースという効率の悪さであった。この効率を改善するために、新しい世代の

研究者たちが新しい方法を考案した。この方法は、多くの人は練習で夢を思い出せるようになるという点に着目した自宅夢見実験だった。

コンピュータに多くの絵を格納しておき、毎夜無作為にひとつの絵をターゲットに選び、画面に提示する。この提示は、普通三時から四時まで誰も人がいない部屋で行なわれる。その部屋は参加者からは遠く離れたところにあり、頑丈に鍵がかけられ、窓もふさいでターゲットが何であるか誰にもわからないよう、厳重に管理されている。

参加者たちは、自宅で見た夢を記録する。そして翌朝、実験室に集まり、四つの絵を見る。そのうちのひとつがターゲットである。参加者は個々に、四つの絵がどれくらい夢の内容と合致するか調べランキングする。

全員分のランキングがそろったら、すべて加え合わせてひとつのランキングにする。参加者全員の総意としてのランキングが決定されたら、コンピュータからターゲットを呼び出し確認する。その瞬間までターゲットが何であるか、誰も知らない。この方法ならば、毎晩一試行の実験を安定して行なえる。特別な睡眠実験室も、徹夜の電気技師も、送信者や判定者さえも必要ない。

### 4.3 夢見実験のメタ分析

2003年、イギリスのノーサンプトン大学の心理学者、サイモン・ジャーウッドとグリス・ロエは、マイモニデスの最初の夢見実験から最近の自宅夢見実験まで、すべての報告を調べた。これらの実験はどれも次の二つの要素を満足しているため、合わせて分析してよい。

第一に、遠く離れた情報が夢で知覚できるかどうかをテストする目的である点、第二に、思わぬところで情報が漏れているとか記録のミスがあったなどの、ありふれた説明を排除する管理条件で行なわれている点である。

ジャーウッドとロエの集計により、47の実験研究で計1270試行が行なわれ、平均の正答率は59.1パーセントであると判明した(図7-1:次頁)。偶然平均の50パーセントより9.1ポイントの上まわりは小さく聞こえるかもしれないが、偶然でこれほどの片寄りが出る可能性は220億分の一である。偶然仮説はもはや成り立たない。

絶対的に正しい実験などありえないので、グラフでは、真の正答率が存在する推定範囲が(上下に標準偏差の幅をもつ)誤差棒として示されている。全データが累積されている右端の誤差棒では、偶然期待値のレベル(点線の水平線)よりも、標準偏差の幅の6.4倍(これをZ値が6.4であるという)上に正答率の点が位置している。

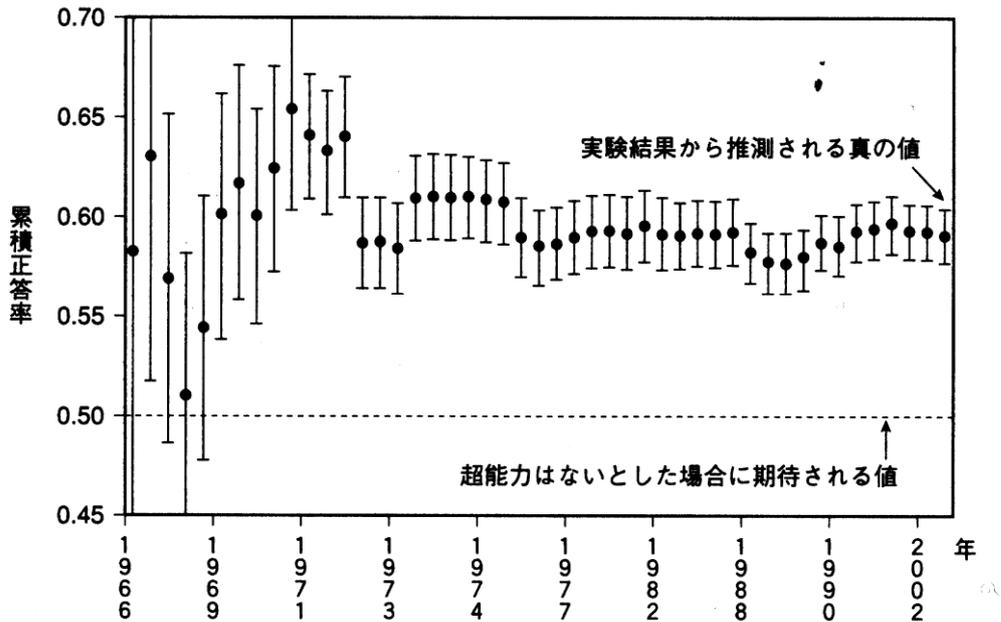
これは偶然仮説の棄却に、99.99999996パーセントの信頼がおけることを意味する。

つまり、ジルの夢のなかに、ジャックが送信した内容やコンピュータが表示した内容が含まれていると、確信をもって言えるのだ。

偶然ではないとすると、他にどのような説明が成り立つだろうか。ひとつの可能性は、実験のデザインがずさんで、結果はみな誤りや失敗によるものだという説明である。だが、実際の実験の報告を読むと、そうした説明も成り立たないとすぐにわかる。このような実験を行なう研究者は、実験にともなう多くの落とし穴を熟知しており、そうした問題を回避するよう

巧みに実験をデザインしている。実験の質の向上に伴う結果の変化はすでに厳格に評価されており、夢見実験の結果はずさんなデザインに起因するものではないと明示されている。

図 7-1



統計的に顕著に現れた結果はもしかすると、成功した研究ばかりに注目して、失敗した研究を無視しているからかもしれない。数千もの研究が見逃されていたり、報告されないでいたりしたうえ、それらの結果が否定的であったならば、さきの 220 億分の一という数字も色あせてくる。今回の結果がそれに該当するためには、次の二つの疑問に答える必要がある。第一に、失敗した実験を見逃しているとして、現在示されている有意な数字を無効化するには、いったいいくつぐらいの実験が隠れていなければならないか、第二に、見逃した実験があると実際のところ推測が可能か、である。この疑問はこの先何度も登場する「お蔵入り問題」に相当するので、ここではちょっと詳しく解説しておいたほうがいだろう。

#### 4.4 お蔵入り問題の検討

(省略)

以上、IV.は、本書第 7 章の要点を抄録した積りであるが、4.4 までの全文も pdf 化してあるので、ご覧になりたい方は下記赤枠をクリックされたい。

第 7 章は pp.147-186 以下の pdf は pp.147-165

**第 7 章 意識に現れる超心理**

#### V. 地球意識の鼓動を聴く

以上は、個人の超心理現象に関する話だったが、本書第 11 章で集団の超心理の話が出て来て、これが私の強い関心を引き寄せた。

と言うのも、これは拙論「伝説大東亜戦争」の深化に使えるような気がしたからである。

第 11 章の始めの部分を抄録する。

-----  
(前略)

もし超心理が存在するならば、次のことは容易に想像できる。神経線維が集まって脳になるように、超心理が大勢の脳や心を結びつけて「集合的な心」を形成している可能性である。

この可能性はどのようにテストできるだろうか。

ひとつの方法は乱数発生器 (RNG) を使うことである。RNG の挙動で心と物の連関作用を検出できる見こみが、これまでの実験で判明している。RNG の出力を連続的に記録しておけば、集合的な心と物との連関作用の「観測」が自動的に行なえるだろう。

1990 年代なかばに、プリンストン大学の心理学者ロジャー・ネルソンが、この研究を「フィールド意識 (場の意識) 研究」と呼んで、実験を開始した。

この実験は、RNG の出力する乱数が純粋にランダムであることを利用している。ランダムさは、技術的な用語では「エントロピー」と呼ばれ、その変動量は統計的に容易に算出される。もし、人々の一体感にあふれた場 (瞑想の会や宗教的儀式など) に設置した RNG のエントロピーが減少すれば、同調した心がその場 (フィールド) を秩序づけたのでは、と推測できる。言い換えれば、もし心と物とが連関しているならば、心と物との一方が高度に組織化しているときには、もう一方にも奇妙な組織的变化が見られるのも当然だろう。

## 5.1 フィールド意識の実験

2005 五年までに、100 以上のフィールド意識実験が、アメリカ、ヨーロッパ、日本から報告されている。

アメリカ先住民の儀式、日本のお祭り、劇場公演、科学の国際会議、心理療法のつどい、スポーツ大会、テレビのライブ中継で行なわれた実験があり、全体として、大人数の一体感にあふれた活動と、RNG の乱数出力の異常な組織化とが同期する傾向が強く示されている。

工学者のウィリアム・ロウは、創造的な討議の場では、たびたび「人々が一体になったエネルギー」を感じることから、この種の研究に興味をもち実験を試みた。彼は、そうした場に RNG を設置して、エネルギーを感じた討議と、乱数出力が一分以上偶然から片寄った討議が一致するかを調べた。乱数は討議中、およびその前後ともに記録され、討議参加者の印象は、乱数の記録を見る前に収集した。実験計画が事前に設定されたうえで、11 回の討議が行なわれた。

11 回の討議のうち、参加者がエネルギーを感じた回は 8 回あり、そのうち乱数出力が片寄った回は 8 回すべてであった。参加者がエネルギーを感じなかった回は残りの 3 回であり、そのすべてで乱数出力の片寄りは見られなかった。言い換えれば、11 回の討議すべてで、参加者の報告と乱数の片寄りが完全に合致した。

ロウは、論文の結論で次のように述べている。

(フィールド意識実験は、) 個人ひとりでなく大勢が、一体感をもって心を働かせている状態を、信頼性高く検出できるようだ。厳密な実験計画によって得られた経験的証拠が、「人々が一体になったエネルギー」の存在と、それを人間が感じとるだけでなく、物理的にも測定が可能であることを明示している。(『科学探究論文誌』第 12 巻、1998 年)

もちろん、すべてのフィールド意識実験が成功しているわけではない。多くの実験結果の成否を調べたロジャー・ネルソンは、成功しやすい実験の条件を次のように推測している。とくべつな暖かみや親密さに満ちた一体感が存在し、さらに多くの人々をひきつける魅力にあふれた場、人々が深く傾倒する目標が掲げられ、それに向かった各人の寄与が重視される場、大洋や山頂などの精神的に高揚する場所や、新奇な着想を尊び、創造性やユーモアが現れる瞬間、である。一方、失敗しやすい条件は、個人がそれぞれひとりで、主として客観的で分析的な仕事をしている場、活動に対する人間的な参与の度合いが小さいとき、活動がありふれて退屈であるとき、などである。

(中略)

## 5.2 地球意識プロジェクト

1997年8月31日、世界中の目を釘づけにする大事件が起きた。ダイアナ妃がパリで、交通事故で死亡したのである。この悲劇的事件はその後数日間、世界各地のテレビニュースを独占した。

私たちは、一週間後にダイアナ妃の葬儀がライブ中継されると知り、フィールド意識の観点から「地球規模の」心の同調を調べる格好の機会であると気づいた。世界中でおそらく数億人の人々が葬儀のもように注目すると思われたからである。

私たちの仲間で RNG を所有する欧米の 12 人が、ダイアナ妃の葬儀とその前後の期間、乱数を記録しつづけた。後日、おのおの独立して作動していた 12 台の RNG から記録データを集めて分析してみたところ、予測されたように、有意な地球規模の同調が検出された（偶然比にして 1000 分の 1 の偏差）。

(中略)

この事は、「地球規模の心」の探究価値を明らかにしてくれた。地球規模のフィールド意識実験を行なうには、たくさんの RNG を世界中に配置して連続的に作動させ、自動的に乱数を記録するのが、実用的方策である。

そうすれば、年明けの行事などの定期的なできごとだけでなく、セレブの悲劇的死、そして自然災害やテロ攻撃などの予期せぬできごとについても、大規模な同調が起きるかどうかが調べられる。

1997 七年の末、ロジャー・ネルソンが、オートデスク社の創業者であるジョン・ウォーカーと、コンピュータ科学者のグレッグ・ネルソンの助けをかりて、この構想を立ち上げた。グレッグは、インターネットを介して地球規模のフィールド意識実験を連続して行なえる、巧みな方法を考案した。

こうして昔のフィールド意識実験は地球規模に拡大されロジャー・ネルソンによって「地球意識プロジェクト」(The Global Consciousness Project)と名づけられた実験がスタートした。

小集団で一緒に活動する人間の一体感を調べる旧来の実験に対して、GCP は、広範に注目を集める大事件によって生じる、地球規模の心の同調を推測できる。

インターネットを使って手軽に世界中のニュースを知るようになった今日、大事件の数分後には世界の人口の数パーセントがそれを知ると想定できるからである。

(中略)

1998年に三台の RNG から始まった GCP ネットワークは、時をへて、RNG のコンピュータを管理するボランティアが見つかるに従って拡大した。2005年の4月までに65台の RNG が稼動するまでになり、その設置地域は、ヨーロッパと南北アメリカのほぼ全域と、インド、フィジー、ニュージーランド、日本、中国、ロシア、アフリカ、タイ、オーストラリア、エストニア、マレーシアにまで至った。

地球規模の心物連関作用仮説は、RNG ネットワークが生成する乱数が、事前に決められたかたちで偏差することで検出される（偏差とは偶然期待値から遠く片寄ること）。この分析はふつう、イベントの発生時の数分前から数時間後までの乱数データに対して行なわれる。2005年の4月までに、地球規模で注目を集めたと推測される185のイベントにかんして分析が行なわれている（この分析は独立した研究者によって二重に行なわれ、結果の正しさが確認されている）。185のイベントには、自然災害、テロ活動、大瞑想会、スポーツ試合、戦争の開始や終結、名士の悲劇的死などが含まれる。

（中略）

### 5.3 誰がために鐘は鳴る

GCP 発足以来最も劇的なイベントは、2001年9月11日のテロだろう。

その日、ネットワークの乱数に数々の衝撃的変化が起きた。その分析結果が、ありがちな欠陥や失敗ではなく、特異性に由来するのだと理解するために、乱数データのある種のベル（鐘）と考えることにしよう。

すなわち、ネットワーク上の個々の RNG は、連続的に乱数を発生させていて、それを定期的に一括している（毎秒200ビット）が、その値の分布はつり鐘形のベル曲線（正規分布）になるはずである。理論的に求まる完全なベル曲線からの片寄りには、おもに四種類がある。分布が左にずれる（平均値が小さくなる、つまり0が多く出る）場合、分布が右にずれる（平均値が大きくなる、つまり1が多く出る）場合、ベルが上からつぶされて平たくなる（分散が大きくなる、つまり0が多く出たり1が多く出たりする）場合、ベルが左右から押されて細長くなる（分散が小さくなる、つまり0と1が均等に出やすい）場合である。最初のふたつの場合は、今回の目的にはそぐわない（0と1はたまたま決められるので、どちらが多く出るかを予測する根拠がない）。そこで、残りのふたつの場合について分析することになる。ベル曲線の幅がどのように変わるか、すなわち毎日ベルがどのように「鳴る」のかである。

図 11-9(次頁)に、2001年に作動していた36個の GCP ベルの鳴動をグラフにした。縦軸のプラス2を上まわると乱数分布が極度につぶれて平たくなったことを示し、マイナス2を下回ると極度に細長くなったことを示す。図によると、プラス3からマイナス3まで変化している特異日があるが、それは9月11日、テロの当日なのだ。

図 11-10(次頁)に、その日の拡大図を示す。こちらの図によると、曲線のピークは、8時46分に世界貿易センタービルに最初のジェット機が突入する2時間前に生じており、午後2時すぎまで約8時間かけて最低値へと落ちこんでいる。

図 11-9

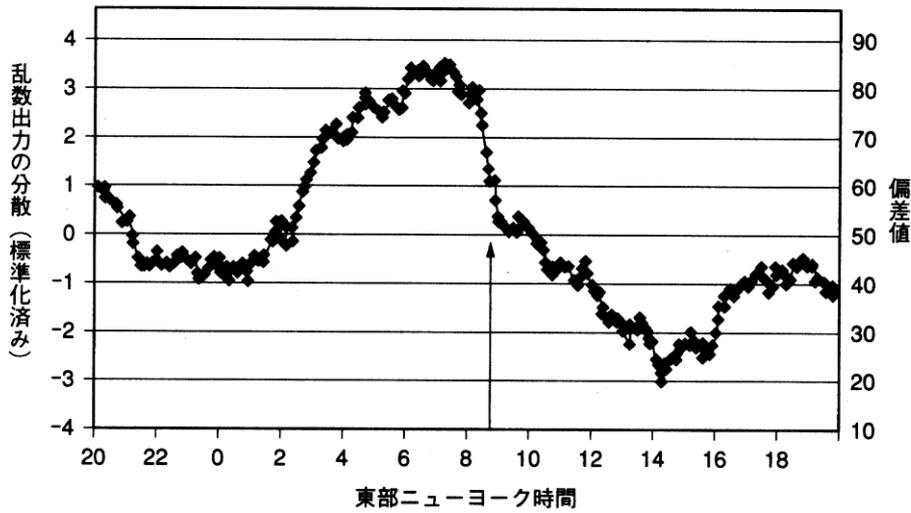
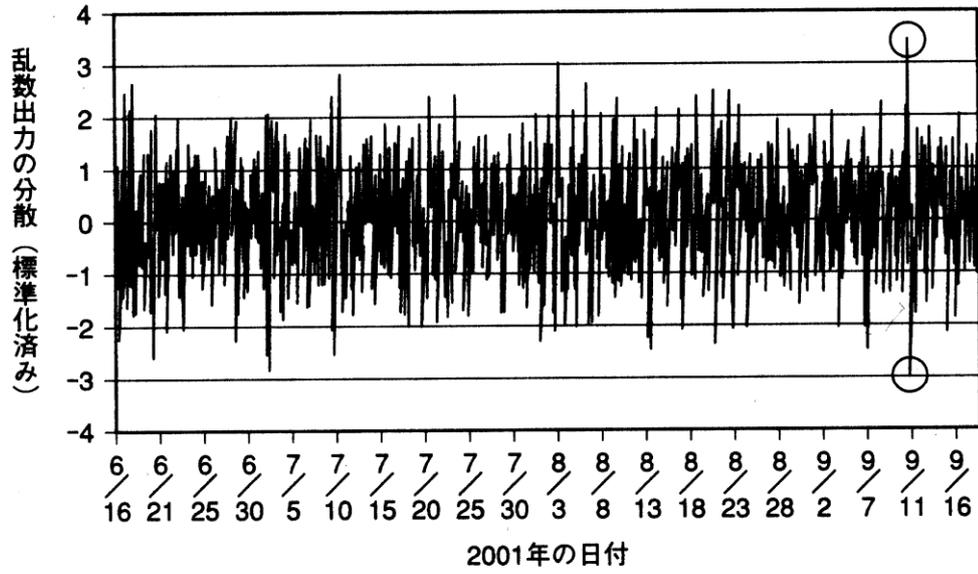


図11-10:

GCPの「ベルの臍動」の9月10日夜から11日夜までの拡大図。2001年でもっとも大きな動きが含まれている。矢印は世界貿易センタービルに最初のジェット機が突入した時刻。

テロ攻撃の前にピークがある理由の解明は容易ではない。しかし、前に述べた予感実験のデータを思いおこさせる（GCP データでは、大地震の二、三時間前などにも同様の「前兆波」が出ている）。2001 年の全日を調べても、このようにプラス3からマイナス3まで大きく落下した日は他になかった。比喩的に言えば、GCP の鐘がもっとも大きく鳴り響いた日なのである。

何がこの大変化をもたらしたのだろうか。その日の大規模な心の同調が、物の同調をひき起こし RNG に影響したのだろうか。たしかにそのように見える。それを調べるために私は、RNG 同士がどの程度似た動きをしているかを数値化した「相互相関値」を算出した。予想どおり、この値は9月11日が2001年でもっとも高かった。

世界中の何百キロ、何千キロ離れた RNG 全体が同様の挙動を示したということは、その日に GCP の鐘が響きわたったことを意味するのだろうか。

（中略）

以上のフィールド意識実験により、小さな心物連関作用が、従来の実験室だけでなく、管理していない実生活状態でも見られることが示された。フィールド意識の研究は、集合的な超心理の新しい証拠を提供したうえに、「誰がために鐘は鳴る」のかという長年の謎を、新しい切り口で探究している。おそらく、かの英国の詩人ジョン・タンがすでに、16世紀に正しい答えを暗示していたのだ。

「ひとは誰ひとりとして大洋に浮かぶ孤島ではない。

…だから誰がために鐘は鳴るのかは、おのずと明らかである。

それはあなたのためなのだ。」

#### 5.4 心と物の繋がり(奇跡の話)

表-1 から心と心の繋がり(夢見実験など)、心と物の繋がり(乱数発生器念力)の存在が確かなものになったが、後者について言えば実験で確認できるはこの辺止まりで、大きな物体を動かしたり、出現させたりする事は出来ない。

しかしそれら についても実社会で起こっている確からしい証拠がある。

ここでは、4.マイケル・タルボット著 の第5章「奇跡がいっぱい」(頁数55)から比較的短文の例を一つ紹介する。

『毎年五月、と九月、ナポリの大寺院ドゥオーモ・サン・ジェンナーロの前には、おびただしい数の群集がある奇跡を目撃するために集まってくる。その奇跡とは、ある一本の小さな瓶の中に収められた茶色の粉末状の物質にまつわるもので、これは紀元305年にローマ皇帝ディオクレティアヌスの手によって斬首の刑にあったサン・ジェンナーロ、別名聖ヤヌアリウスの血液であると言われている。伝説によれば、この聖者が殉教したあと、従者の女性が聖遺物として彼の血を少々残しておいたという。その後実際に何が起こり、これがどうなったのかを知る人はいないのだが、ともかくこの血が13世紀の終わりには寺院の銀の聖遺物箱に収まって再び出現したのである。そしてこの奇跡とは、毎年二回、群集が瓶に向かって叫びをあげると、茶色の粉末状の物質が泡立った真紅の液体に変わるというものだ。この液体が本物の血液であることにはほとんど疑いがない。1902年、ナポリ大学の科学者の一団がこの液体に光線を通し、分光器を使った分析を行なったが、そのときこれが血液であることが実証されたのである。残念ながら、血液を入れた聖遺物箱はきわめて古く、壊れやすいため、教会

はこれを割って他の検査を行なうことを許可しないので、この現象についてまだ完全な調査が行なわれたことはない。

しかし、この変質には平凡な出来事以上の何かがあるとの証拠がさらに存在している。これまでの歴史の中で（この奇跡が人々の面前で行なわれたとの最初の記録は 1389 年にさかのぼる）この血液が液化しようとしないうちがあった。まれなことではあるものの、ナポリ市民はこれをきわめて不吉な前兆と考える。過去にこの奇跡がなかった年に起こった事件としては、ヴェスヴィオ山の噴火や、ナポレオンのナポリ侵略などがある。さらに最近では、1976 年と 1978 年、それぞれイタリア史上最悪の地震と、選挙でナポリに共産党の市政が誕生する予兆としてこれが起きている。

サン・ジェンナーロの血が液化するのは奇跡なのだろうか。少なくとも現在知られている科学の法則では説明不可能に思われるという意味においてはそのようである。ではこの液化はサン・ジェンナーロ自身によって引き起こされているのだろうか。私の感じでは、この奇跡を目にしている人々の強烈な熱情と信念が原因となっている可能性のほうが高いと思う。私がこう言うのは、世界中の偉大な宗教と関係がある聖者や超人的能力で知られた人たちが行なってきた奇跡は、超能力者の手でそのほとんどすべてが再現されているからだ。

これは、聖痕と同様、奇跡は人間の心の奥深くに存在する力、私たち一人ひとりの中に隠された力によって生み出されることを示唆している。『神秘主義における物理現象』を著した神父ハーバート・サーストン自身もこの類似性に気づいており、どんな奇跡現象であっても、真に超自然的な原因（心霊的な、あるいは超常的原因ではなく、という意味で）によるものとするのを好まなかった。この見方を支持するいまひとつの証拠は、ピオ神父やテレゼ・ノイマンを含めた多くの聖痕発現者たちは、超能力があることでもよく知られていたという点である。』（以下略）

-----  
ここには、近世記録が確かな奇跡と呼ばれる例が沢山紹介されているが、20 世紀後半で最も有名な物質化の例として、サイ・ババを挙げる事にする。(原文は可成りの長文)

-----  
『印度南部に住む 64 歳(原著発行時、2011 年 84 歳で歿)の聖者である。多数の目撃者の話によると、ペンダント、指輪や宝石を空中からつまみとるように生み出すという。(中略) アイスランド大学の心理学者エレンデュール・ハラルドソンはサイ・ババの研究を 10 年以上続け、その結果を近著『現代の奇跡---サイ・ババにまつわる超能力現象に関する調査報告』の中で発表している。ハラルドソンは、これが手品の類ではないという決定的な証明は出来ないと認めているものの、何か超常的なことが起きていることを強く示唆する大量の証拠を提示している。』（以下略）

-----  
尚、ウィキペディアにも可成り詳細な記述を見出す事が出来る。

## VI. 理論構築の試み

以上IV.、V.で述べてきたような現象を統一的に説明できる理論構築の試みは数多くなされて来た。

超心理現象の理論を築くには、解決すべき三つの重要問題がある。

第一の問題は、常識はずれの方法で情報が時空間を伝播することの説明で、アインシュタインも言っているが、これは「物理学」の問題である。第二の問題は、この情報が通常の感覚器官をへずに心のなかに届くこと、および、逆に心のなかの情報が遠くの物体に影響をおよぼせることの説明で、これは物理学と「神経科学」の問題である。第三の問題は、心のなかに届いたその情報がしばしば報告できるほど明確なたちで意識に現れること

の説明で、これは神経科学と「心理学」の問題である。

物理学が先頭にあがっているが、三つの問題はどれも、物理的実在の概念に密接に関連しているからである。

もし、私たちが生きる世界の物理的媒体が前述のような情報伝播を禁じているのであれば、唯一の合理的な結論は「超心理の報告は誤りだ」となる。どんなに実験的証拠があっても、この見地を堅持すれば、ESPとは「どっかに誤りがあるよ」の省略形にすぎない。

幸運なことにここまで議論したように、物理的実在の本質にかんする認識は、前世紀までに大きく展開してきた。それが示すところは、「誤りありき」の仮説は見こみうす、超心理仮説は見こみあり、である。

(中略)

## 6.1 超心理の諸理論

広い意味で理論とは、観測結果の記述である。理論には、数学の方程式のような精確な説明をするものから、比喩や神話のような大ざっぱなものまでがある。なかでも科学理論は、テストできる（すなわち反証可能な予測をする）という点で、特別な力をもっている。理論をテストする方法がなければ、その理論が正しい方向を向いているか否かについて、何も言えないままである。

超心理の理論は、数式から神話まで、テストできるものからできないものまで、きわめて広範囲におよぶ。またそれらには、一般的な超心理効果を説明するものと、ある種の体験にまつわる効果のみを説明するものの、ふたつのタイプがある。以下の短い解説は、すべての理論を網羅しようというものではない。これまで提案されてきた理論の特徴を、いくつかの代表的理論とともに明示したものである。

理論を特徴ごとにまとめると、懐疑的理論、信号伝達理論、目的指向理論、場の理論、集合的心の理論、多次元時空理論、量子力学的理論などとなる。

この中から懐疑的理論と現在最も注目している量子力学的理論を紹介したい。

### 懐疑的理論

この理論の特徴は、超心理の報告はみな、広い意味での心理学的過失によって生まれたと説明することにある。ここには、思い違い、記憶の装飾、期待効果、錯覚、無意識的学習、偶然の一致の過大評価、実験企画の欠陥、選択的報告、目撃証言の薄弱さ、精神病理、妄想、無知、不正手段などが含まれている。

状況によっては、これらの要因で、超心理効果のように見える現象が起きることはまちがいない。実際のところ、超心理体験の証拠が逸話ばかりであれば、こうした懐疑的説明に反論できる説得的な主張は難しい。しかし、本書で議論した実験的証拠のほとんどがそれらの説明を排除できているとすれば、懐疑的理論が唯一の超心理現象の説明とするのは不適當

である。

(中略)

## 6.2 量子力学的理論

量子力学にもとづいた超心理の理論は、さらに五つに分類できる。

物理学者ヘンリー・スタッフの指摘を確認してから細かく見ていこう。

「意識への量子論的アプローチはしばしば、意識が神秘的で量子論も神秘的だから両者は関連しているにちがいない、という安易な発想だとされる。この批判は、量子力学の本質について根本的な誤解をおかしている。量子力学は、心と物を結びつける問題に対する実証科学的解決を基盤にして、できあがっているのだ。」

- ① 観測理論 省略する
- ② 情報システムモデル 省略する
- ③ 弱い量子論 省略する

### ④ ボームの暗在系／明在系

アインシュタインの薫陶を受けた物理学者デイヴィッド・ボームは、量子論が私たちの経験よりも深い実在の存在を示していると感じた。彼は、それを「暗在系（内蔵秩序）」と呼び、時空間や物質、エネルギーなどの概念を超えた、「不可分な全体論的領域」を明示しようとした。暗在系においては、すべてが畳みこまれており、おたがいにからみあっている。対照的に「明在系」は、日常的に観察される世界で、暗在系から現れ出る常識的領域である。

ボームは、全体情報が暗在系に畳みこまれる仕組み、逆に言えば、暗在系のどの部分であっても全体を反映する仕組みを、ホログラムを比喻にして説明した。この視点から暗在系は人間の経験に次のように現れるという。

たとえば、個々の人間を他の人間や自然と作用しあう独立した実在と考えることは究極的にひとを誤らせるだけでなく、その考え自体が誤っているのである。むしろ、それらはみな単一の総体の射影なのである……なぜなら内蔵秩序にあたっては、心は物質一般を包み込んでおり、したがって心はその特殊な場合としての身体を包み込んでいると言わねばならぬと同時に、身体は心を包み込んでいるばかりでなく、あるいみで全物質界を包み込んでいると言わねばならぬからである。……じっさいに生じていることを不足なく説明しようとするれば、少なくとも当の身体以外の物質まで含めねばならないことは明らかである。そして最終的には他の人びとを、社会を、さらに一つの全体としての人類をも含めねばならない。

……

『全体性と内蔵秩序』井上忠・伊藤笏康・佐野正博訳、青土社、349－351 ページより]

神経科学者カール・プリブラムは、ボームの量子ホログラム的実在に類似した概念を独自に提唱し、脳のプロセスに適用した。脳の構造と機能を解明するにあたってプリブラムは、脳の記憶特性が光学ホログラムの機能と似ていることに着目した。光学ホログラムは脳のようにダイナミックではないが、と前置きしたうえで、プリブラムは次のように述べて

いる。

脳のなかで、億万個にもものぼる神経細胞間で活動電位がとびかっているのをみると、深い量子レベルのプロセスと同様のことが起きているのではないかと思う。

……この見方がほんとうに正しいとすると、量子的現象が……私たちの生理学的プロセスや神経システム全体にまで適用できるだろう。すると、人々が心霊体験と呼んできた経験についても、おそらく同様の説明がなされるだろう。なぜなら、心霊体験の記述は、量子力学の描像とかなり似ているからである。

ふたつのホログラム概念は、作家マイゲル・ダルボットの

「ホログラフィック・ユニヴァース」〔最初に紹介した 12 冊の 4.〕によって広く知られるようになった。

ダルボットは、ボームの概念とプリブラムの概念をあわせると、かなり広い範囲の超常体験や心霊体験を説明できるのではないかと論じた。同様の提案は心理学者ケン・ウイルパーの編著書でも議論されている〔「空像としての世界」青土社、および『量子の公案』工作舎〕。今やホログラム概念は、天文学者によって宇宙の構造の数学モデルにも使用されている。また「量子ホログラム」（量子波動の干渉特性にもとづいた自己参照システム）も注目を集めている。（以下略）

#### ⑤ スタッブ——ノイマンの理論

原書の著者は、この理論に④と同程度の頁数を割いて解説しているが、ここでは省略する。

### 6.3 からみあう心たち

「からみあい」の名づけ親であるシュレーディンガーは、「私たちの生活世界は、全体存在の一断片ではない。それは、ある意味全体そのものなのだ。だから、その全貌は、けっして一目で見わたせるものではない」という。

からみあう心たちを正確に描写し、超心理現象の予測に用いるには、物理学、神経科学、心理学の成果を結びあわせたモデルが必要である。そのモデルでは、物理学の観点から、通常の時空間を超えたつながりを支える媒体が説明されねばならない。神経科学の観点からは、心（心と脳の一体システム）がその媒体を感知できると同時に、その媒体に対して主体的に関与できねばならない。心理学の観点からは、その媒体のなかを心が「航海する」ときに、注意や意図のプロセスが鍵となる役割を果たす必要がある。

第一の問題は、実在の基盤が非局所的なつながりを許容するかどうかである。これまで見てきたように、80年間の理論的な研究と、20年間の実験的な研究で、これは物理的に裏づけられている。量子論は、原子領域から宇宙規模まで、物理的挙動を記述するのに成功している。私たちの身体や心にかんする領域だけは量子論が中心にならない、というのでは、それこそ奇妙である。ジョージメイソン大学の、科学史家ロバート・ナデューと物理学者メナス・カファトスは『非局所的宇宙』のなかで次のように述べている。

宇宙の歴史におけるすべての粒子は、アスペ実験\*によって明らかになったかたちで、結びあわされている。実質上、私たちの周りの物理環境は、ビッグバンから現在に

至るまで相互に影響をおよぼしあってきた量子によって構成されているのだ……

……量子的からみあいには量子状態に粒子が加わるに従って飛躍的に複雑になるが、理論的にはその限界はないと考えられる。そうであれば宇宙は、基本レベルで巨大なネットワーク状の関係を維持し、そこではエネルギーや情報を介することなく、遠くのもの「時間の隔たりなしで」つながりあっているのである。奇妙でばかげたことのように思えるかもしれないが、物理的実在はすべて、未来の変化に対して全体でひびきあうひとつの量子システムなのである。

人間的経験のような現象を理解するうえでは、量子的実在は役に立たないと考えたくなるのももっともである。しかし、脳がとりうる複雑で多くの状態から、一連の主観的な経験が実現していくには「大きな影響が必要である」とも判明していないのである。ナデューとカファトスは「もはや、量子の奇妙さを特殊な世界に閉じこめておくことはできない。ポーアは正しかった。私たちは量子力学の世界に生きており、古典物理の見方は世界の表層的な近似にすぎないのである。ならば、量子領域の認識論は、物理界すべてに拡張できるであろう」と述べている

\* : アラン・アスペ フランスの物理学者。1982年に「ベルの不等式のやぶれ」の実験的証明を試みた。その後より精緻な実験が4つのグループで独立に行われ、2015年に完全に確認された。その実験により、光子同士からみあいは、50kmに及ぶ光ファイバーを介しても存在する事が確認された。

## Ⅶ. おわりに

書籍3の最後に「おわりにとして」ラディンは言っている。

『いつの日か超心理研究は、今日の経済学や生物学の入門と同様に、大学で教えられるようになるだろう。もはや論争の的とされることもなく、自然についての諸学問と同様、よく整備された教育課程の一部として学ばれるのだ。そのときはもう、超心理はかつて科学から遠い辺境に追いやられていたなどと、覚えている者は誰もいないだろう。新たに、今では想像もできないことが論争の的になっているにちがいない。

(中略)

超心理の炎は今、過去に例がないくらいに燃えあがっている。ところが、その啓蒙の光は、かよわくうつろいやすい。まだ名前もない領域の探究には危険がともなう。怖れる者たちはたいてい、暗闇から目をそむけたうえに、誰もそちらを見ないように仕向けるのだ。しかし、価値ある生き方とはなんだろうか。

科学の地平をきり拓くには、冒険や論争は絶対に避けられない。真の発見が期待できるときはいつも、そうした危険をあえて冒すことに価値がある。

大胆たれ。好奇心の炎を絶やすな。勇気をもて。』

このラディンの叫びとも言える言葉の中に、超心理学の置かれていた状況が見える様子がする。

しかしまた、原書発刊の2006年頃までが、超心理学華盛りの時期であったのかも知れない。「超心理学」で検索してみたが、3.、4. に匹敵するような書籍は、それ以降発刊されて

いない。

以上、超心理学を認める立場から紹介して来たが、これを全く認めない学者も多い。ここではその一人、シェリー・ケーガンの著書

**13. シェリー・ケーガン著 柴田裕之訳 『「死」とは何か』[完全翻訳版] 2019 文響社**を紹介する。

本書は、ケーガンがイエール大学で行った講義(人気があったらしい)を元に纏めたもの。ケーガンの専門は、道徳哲学、規範倫理学である。

その立場から、「魂」の存在を完全に否定している。

臨死体験など超自然現象にも触れているが、それらにも強い疑念を持っている。

ただ、IV.、V.で紹介した様な超心理学実験については、全く触れていないのが不満である。多分従来の哲学では、超心理学を論ずる前に「量子のもつれ」や「ホログラフィ」を説明する事が困難と思われ、IV.、V.の現象には触れる事が出来なかったのではないかと思っている。

実は、私敏翁がこの分野の検討を開始した経緯を振り返ると、先ず臨死体験の検討が始めに有り(2019年5月)、**大乘仏教と臨死体験**次に13.が来る(2019年11月購入)のである。

今思えば、13.の魂の存在の完全否定の考えの暗さが、「死生学」を呼び寄せる心的要因だったのかも知れない。

本サブタイトル「**靈魂の存在 超心理学**」の話は大分長くなってしまったので、この辺で終わりにしたい。

靈魂存在の科学的検証に頁を使い過ぎてしまった。

未だ語るべき重要なテーマとして、「生まれ変わり」など「**靈魂不滅**」があり、1.~4.でも論じられているが、科学検証には至っていない。

それらを含んだ現在の私の理解を次に記して本稿を終わる事にしたい。

1. 身体の医学的理解を超えた靈魂は存在する。これは多分人間すべてに当てはまる。
2. この靈魂の不滅か否かは、証明されていない。

靈魂不滅を示すと思われる事例は、多数見つかっているが、これは人間すべてに言えるかは全く不明である。

これで、『死生学とスピリチュアリティ』シリーズは一旦終了としたい。

私敏翁は、このシリーズを纏め終えて私の死生観を覆っていた霧の様なものが多少とも薄らいで来た様に感じている。

少し休みエネルギーを蓄えてまた探求を続けたいと思っている。

本シリーズに、永らくお付き合い願った諸兄に多少とも参考になったならば望外の喜びである。

完